
グランドサザンクロス秘密結社 S市支部自殺担当課

メネ@未確認

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランドサザンクロス秘密結社 S市支部自殺担当課

【Nコード】

N9910V

【作者名】

メネ@未確認

【あらすじ】

秘密でない秘密結社に勤める男は、自殺を阻止するという仕事を
受け持っていた。

＊というおはなし。

(前書き)

感想・批評・誤字脱字報告などありましたらどうぞ。

(・ω・) メネ

五階建ての小ビルの屋上で、何やら男女が乱闘まがいのことを起こしていた。

どうやら、暴れている女曰く――

「放して、放してよ！ 私は今から死ぬの、死んでやるの！」

そう言われて放すやつがあるか。男は呆れたように叫びつつ、暴れる女を必死で押さえつける。

男女が立っている、否、暴れているのは四階建て駅ビルの屋上、しかも柵を越えたところだ。いくらか広いとはいえ危ないことには変わらない。

こうして暴れられると俺まで落ちるんだよ、ふざけんなこの野郎――男はそう言ってやりたいようだが、仕事なのだから仕方がないときっぱり割り切っているようでもある。激しい自戒の念によって、男は理性を保っているらしい。

「私の命は私のものでしょ、だから勝手に死んだって関係ないですよ！」

「関係あるわこの馬鹿、いかよく聞け！ お前がここから飛び降りたらな、道路に死体が残るだろ？ それで道路は渋滞し、事故は起き、警察は出動し、ああもう迷惑この上ない！ お前の生死はどうでもいいがな、迷惑掛けてくるんじゃない！」

本当は事故による金の請求が男の会社に来るからなのだが、そんなことは頭が割れようとも言えるはずがない。あんな思考と口調の割に、男は意外と口が堅いのだ。

男の言葉に女は戸惑う。普通自殺を止めるときには、お前が必要な存在などと説くものだ。それを、お前なんてどうでもいい、周りに迷惑掛けるなど言われては哑然とするのも無理はない。

そうよ、だったらと女はふと思いつく。

「なら、部屋でリストカットして一人寂しく死んでやるわよ！ それならいいでしょ！」

「よくねえよ！ お前が死んだあと、その部屋の価値が笑えるほどに落ち込むんだよ！ 大体、前の所有者が自殺した部屋なんて欲しいと思うか？ だからやめろ！」

本当はその損害として金の請求が男の会社に来るからなのだが、そんなことは手首が裂けようとも言えるはずがない。男はやっぱり口が堅いのだ。

女は更に戸惑っていた。やはり男は、自分を必要だとは言ってくれない。もしかして本当に私は要らない子なの、と呟きながら自分で自分を追い詰める。言い方からして、どうやらさっきまではハッタリのようなようだった。

海に飛び込んで死んでやるわ——女が言う。

一体どれだけの人間が搜索活動しなきゃいけないか分かってんのか——男が応える。

遺書書いて山奥で首吊って死んでやる——女が叫ぶ。

遺書があったからって探さない馬鹿はいねえよ、馬鹿——男も叫ぶ。

人を殺して死刑になるわよ——女が喚く。

何を言っているんだお前は、裁判ばかりで死刑執行は何年も後だぞ——男が笑う。

そうした舌戦ののち、疲れた女はどうとう座り込む。それを見て、

男は女を抱えて柵の中に引っ張り込んだ。

俺の母ちゃんの方が軽いんだが——そんなこと言えばまたも死ぬ死ぬと騒ぐんだろうな、と男は考えて直接は言わないことにした。男の判断はおそらく正しい。

ようやくビルの中へと女を連れ込んだ男は、携帯電話で本社へと連絡を入れる。

そうして男の仕事は終わるはずなのだが、あちらの言うことにはすぐ近くのマンションで自殺しようとする者がいるらしい。言外に「行け」という命令が含まれていた。

ううと男は呻き声を上げ、それから女を置いてさっさと階段を駆け下りようとする。そこで女が声を掛けた。

「ちょ、ちよっと待って」

「ああ？」

不機嫌そうな返事に女はびくりと震えるが、しかし意思は固かったようである。

この人なら、私を分かってくれる——女は、なんとこの男に告白しようと考えていたらしい。けれど緊張と動揺で上手く二の句を繋げられない。口は開いても声が出ないその姿、まるで魚類そのものだ。すぐにでも転生可能な状態に見えた。

何も言わない女に対して痺れを切らした男は、とうとう続きを聞かずに歩き始める。あつと女が言うものの、結局立ち止まることはなかった。

呆然とする女はやはり魚のように見える。

十二階建てのマンションの一室で、さっきの男と暗い男が会話を

していた。

どうやら、誰の目にも陰気に見える男曰く――

「す、睡眠薬の自殺って、楽なんですよね……?」

自殺担当課ってそういう意味じゃねえよ。小さな声で悪態をつきつつ、男は自殺希望者の頭をグーでぶっ叩く。ひいいと情けない声を陰気野郎が漏らした。

影の薄い男が手に持っているのは両手から溢れそうなほど大量の睡眠薬。それほど詳しくない者でも、一目で致死量はあるだろうということが分かる。口の堅い男は自分が不眠症だということは明かさずに、規約だから没収だなどとぼかした言い方で薬を奪い取った。そんなあと根暗者が反感を示すも、男に鋭く睨まれては何も言えない。どうやら、見た目と違わぬ性格のようであった。

「なな、な、なんで駄目なんですか……。す、睡眠薬なら、楽に死ねると、聞いたんですが……」

「そういう問題じゃないわ馬鹿！ それに、結構苦しいって聞いたぞ」

え、ほ、本当に？ と、幸薄を体現したかのような男が、驚いて尋ねる。

マジだ、なんか首をガリガリとな……。と、幸運ではなさそうな男がジェスチャーを交えつつ答える。

やめてくださいそんな丁寧にと、意外にも大きな声で不幸男が言う。

死ぬ気なんてなくなつたろう――結構強引な口調で平社員の男が締めくくった。

ちなみに言霊は案外通じたようで、根暗は睡眠薬を置いてすごす

ごと部屋の奥へ戻っていく。もしかして刃物を取り出してくるのはと身構える男だが、別段妙な行動はなく、しいて言うならベッドで泣き寝入りしたぐらいだ。

やっと終わった、と男が安堵の息を吐きながら、前と同じように携帯で会社に連絡を入れた。今回は何もなかったらしく、男の態度は悠々としていた。

腕を回したり伸びをしたりして身体をほぐした男は、陰気男の部屋を後にする。その顔はどこか嬉しそうに見えた。

しかし男は、はたと何かを思いついたかのように立ち止まる。そして目つきを鋭くし、怒った様子で一言放った。

「部長、ちゃんと手伝ってくださいよ」

だって、面倒臭いんだもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連^{たんのう}横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9910v/>

グランドサザンクロス秘密結社 S市支部自殺担当課

2011年10月8日06時41分発行